



月刊 千葉労働動力

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 043 (222) 7207 番

92.11.20 No. 3694

明日となった 運輸部の事故も消し

大管踏切で
遮断桿
損壊

ウソを重ねて 経過をおつ造

【三六九二号より続く】
既報のとおり、十月二二日に発生した大管踏切での遮断桿折損事故に関する団交は、当局内部で見解が矛盾・対立し、回答不能となつてしまつたため、中断されてい

た。この団交のなかで明らかになつたことは、運輸部ぐるみでの事故もみ消し策動であつた。
当局は、十一月十七日、事実関係の整理について、改めて組合側

会社が整理し直した 「事実経過」なるもの

十一月十七日に、会社側から説明されたことを整理すると、概略次のとおりである。

(1) 五時三五分、四二二M 運転士が、大管踏切の遮断桿を押し上げている人を発見し踏切上に停車。同三七分、「遮断桿を通行人が手で押し上げているのを発見したので、非常ブレーキで止まつた。調査し再度連絡する」と、踏切脇の沿線電話で輸送指令に連絡した。

(2) ところが輸送指令は、その連絡を聞き間違え、「遮断桿は折損している」と受け取り、指令長及び通信指令等

十一月十七日に、会社側から説明されたことを整理すると、概略次のとおりである。

(1) 五時三五分、四二二M 運転士が、大管踏切の遮断桿を押し上げている人を発見し踏切上に停車。同三七分、「遮断桿を通行人が手で押し上げているのを発見したので、非常ブレーキで止まつた。調査し再度連絡する」と、踏切脇の沿線電話で輸送指令に連絡した。

(2) ところが輸送指令は、その連絡を聞き間違え、「遮断桿は折損している」と受け取り、指令長及び通信指令等

に「折損」と連絡し、通信は直ちに出勤した。

(3) 一方、四二二M 運転士は、遮断桿を押し上げていたトラックの運転手に事情を聞いたところ「三〇分前から警報機が鳴動し遮断桿が下がつたままの状態だったので不審に思い押し上げていた」と話していたので、住所・氏名・電話番号を聞き、五時四三分、沿線電話でその旨を輸送指令に連絡した。(つまりこの段階で遮断桿は折れていなかった)ところが、この時は、警報機の鳴動によって沿線電話の通話状態が悪く、運転士の

方から一方的に報告したのみで、指令は、前の電話で「折損」と聞き間違えて受けたことを再度確かめたりすることはしなかつた。

(4) ところが、六時一〇分、成田信通区佐原派出の係員が、現場に到着して見ると、「遮断桿折損」の連絡は間違っていたはずなのに、遮断桿がたまたま折れており、交換作業を行い、同二〇分に復旧作業を終了した。いつ遮断桿が折損したのかは判らない

(5) だから、前回団交の回答で運輸部が、「折損していない

(6) また、銚子及び千葉運転区長が「遮断桿折損はなかった」と主張し続けたのも、折損を発見したのが信通だったため、運輸の現場まで連絡がいつていなかったためだ。

「貨物は
格差回答
おな!

— 年末手当 —
3.7% 年末

悪くてよく聞き取れなかった！から、指令長や通信指令等への連絡は「遮断桿折損」のままになっていたというのである！こんなこと

を誰が信じるというのか。いちいちここで拾いあげないが、矛盾はまだ山ほど出てくる。

決定的事実！

トラック運転手の証言

しかも、われわれの調査によれば、決定的な事実が明らかになっている。トラック運転手の証言である。証言によると、

運転して、踏切の所に来ると、前に止まっていた軽自動車の運転手が、「踏切が三〇分も下がったままだ」と言っている。故障だと思い、手で持ち上げていたらポッキリ折れてしまった。そのことは、停車して下りてきた電車の運転士にも聞かれたし、言っている。死亡事故があったことは知らなかったが、あそこ踏切は、ちよつとスピードを出していたら止まれない。少なくとも、百位手前に、踏切と連動した信号をつけてほしい。

結局、当局の言っていたことは全てウソだったのである。驚くべきことに、この点に関しても当局は事実を隠ぺいしようとしている！

組 われわれが直接トラックの運転手から聞いたところでは、こ

う(前述のように)言っているではないか。会社の説明した経過は全くウソだ。

当(輸送課長) えっ、それは聞いていない。

組 前回団交のときに「事実関係を調査し直す」と言ったのだから、トラックの運転手にも、連絡をとって、もう一度事情を聞いてほしい。

当(輸送課長) いや、連絡はとっていない。

組 ウソをつくな。十六日に組合で、トラックの運転士に電話をしたところ、「またですか。さつきもJRの人から電話があったばかりだ」と言っていた。

当(輸送課長) えっ、そんなことは無いはずだ。

組 トラックの運転手がウソをついているというのか。

当 そうは言わないが、ちよつと調べてほしい。調査する。

—— しばらくたって ——

当(輸送課) 連絡をとっていないと言ったのは訂正する。確かに、当直長が電話をしていた。

聞いたことは、①「前に止まっていた軽自動車の運転手が」「遮断桿が」三〇分も降りっぱなしになっていたので上げたい」というので、上げていた②「トラックは大栄町の方に向かうとしていた」③「列車はどの位行ってから止まったのか?の質問に対し」「かなり行つてからかなあ」という内容であった

組 子供の使いでもあるまいし、これでは肝心なことは何も聞いていないのと同じではないか。

当(勤務) 確かに言われるとおりが……。(輸送課に向かつて)電車運転士とどのような話をしたのかは聞いていないのか?

—— しばらくたって ——

当(輸送課) 全く聞いていない。そうです。

組 これでは全く話にならない。

最大の問題は、支社運輸部の姿勢そのものである。運輸部は、「安全」という問題に最も敏感に反応し、他のどの部署よりも真剣に取り組まなければならないはずである。にもかかわらず、「安全」などそつちのけで、JR総連とベツタリゆ着して、専ら「労務対策」(と言えば聞こえがいいが、要するに動労千葉や国労潰し)のみに腐心してきたのが、この間の運輸

トトラックの運転手とは連絡をとっていない、と言ってみたり、「JRから電話が来た」と言っていたことをこちらが指摘したら、「やっぱり連絡してしました」と言ったり、今度は連絡をしながら、肝心なことは何も聞いていなかったり、「調査した」と称して出してきた事実経過が、現場にいたトラックの運転手の証言と全く違つたり、結局運輸部ぐるみの事故もみ消し策動の事実、今や明らかではないか。

今や、事態は明らかとなった。死亡事故が発生した同じ踏切で、わずか一カ月程しかたないうちに、遮断桿折損事故が起きたとなつてはまずいと判断し、当該運転士がJR総連組合員であったことをいいことに、「折損してはなかった」との事故報告をねつ造し、事実をもみ消そうとしたのだ。

向題は、組合潰しのみに腐心する運輸部の姿勢そのもの。

部であった。運輸部長に至っては、千葉支社着任以来、管内運転士の過半数を組織する動労千葉と一度たりとも話しをしたこともないのが現実だ。輸送指令や運転関係の現場長など、運輸部の中枢を担う人事運用は、動労千葉や国労潰しに熱心であるか、動労千葉や国労を脱退するかどうかだけで決められている。その結果、「これで事故が起こらない方がおかしい」と

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

現場の運転士皆が感じるほど、現場はメチャクチャになっている。何度申し入れをしても、「出発信号機が赤でも列車を走らせろ」と指令する指令員が後を断たない。支社はその度にひらきなおし、あげくの果ては事故もみ消しである。われわれは、もうこれ以上黙っている訳にはいかない。

運輸部の「事故隠ぺい」を許さず、自らと乗客の生命と安全を守るために立ちあがる